

あいちの海水浴場のあゆみ

1 海水浴前史 「大野の潮湯治」

現在、海水浴は夏のレジャーの代表として日本全国で広く行われている。ところが、日本で海水浴が行われるようになったのは意外に新しく、一部の例外を除き、明治10年代以降のことであると考えられている。江戸時代以前の人々は、漁民が漁のために海に入ることはあっても、海に入って海水に身を浸したり、海中で泳いだりすること自体には、価値を見出していなかったようである。

その稀有な例外の一つとして、知多半島の大野（現常滑市）で行われていた

「潮湯治^{しおとうじ}」がある。潮湯治は病氣治療のために行われたもので、江戸時代末の『尾張名所図会^{おわりめいしょづえ}』や『郷中知多栗毛^{ごうちゅうちたくりげ}』によると、「諸病を治す」として有名であり、大野は潮湯治を中心とする観光地として大いに賑わっていたことがわかる。



『尾張名所図会』「潮湯治」

2 医療行為として始められた明治期の海水浴

さて、明治初期、西洋医学を学んだ医学者たちは、海水浴の医学的な効果に注目し、実際に治療法として行うことを奨励し、海水浴場を開いた。日本で海水浴が広く行われるようになるのは、これ以後のことである。その医学者の一人で、愛知病院長だった

後藤新平^{ごとうしんぺい}（1857 - 1929）の撰述

による『海水功用論』が1882（明治15）年出版されている。この書は、潮湯治が行われていた大野の実地検分に基つきつつ、ドイツの医学書の



大野海水浴場

内容を紹介して海水浴の医学的効用を説いたもので、一般の人を対象とした日本で最初の海水浴啓蒙書といわれる。後藤はその後、内務省衛生局長^{ながよせんさい}長与専齋（1838 - 1902）と共に再び大野を来訪して詳細な調査や実験を行い、さらに愛知県令の^{くにさだれんべい}国貞廉平（1841 - 1885）が海水浴を奨励、後援したため、大野は海水浴場として一躍注目されるようになった。これが愛知県における近代的海水浴の始まりである。

その後、各地に海水浴場が開かれ、明治末期には知多半島南部の^{もろさき}師崎、^{しのじま}篠島、^{うつみ}内海（ともに現南知多町）、三河湾の^{がまごおり}蒲郡、^{ごゆ}御油（現御津町）、^{さくしま}佐久島（現一色町）などが海水浴場として知られていた。医学者によって奨励された当初の海水浴は、あくまで病氣治療を目的としたものであったが、次第に保養や娯楽を目的とするものへと変化していった。

3 観光地としての発展、戦後の全盛期、そして現在

大正期に入ると、鉄道を中心とする交通網の発達にともない、その沿線に海水浴場が設けられるようになる。愛知電気鉄道（現名鉄常滑線）沿線の^{しんまいこ}新舞子（現知多市）、三河鉄道（現名鉄三河線）沿線の^{しんすま}新須磨（現碧南市）などが有名である。新舞子のように海水浴場を中心に大規模な観光開発が進められる例も現れる。昭和初期の知多電気鉄道（現名鉄河和線）の開通は、名古屋方面から南知多地方への所要時間を一気に短縮するもので、内海をはじめとする海水浴場が、観光地として隆盛するきっかけとなった。



新舞子海水浴場



新須磨海水浴場

戦中戦後の混乱を経た1950年代（昭和20年代後半から30年代）は、県内各地の海水浴場が大変な賑わいを見せた全盛時代だった。一方、1953（昭

和 28 年)の 13 号台風や、1959 (昭和 34) 年の伊勢湾台風は、海水浴場にも大きな被害をもたらした。これをきっかけに閉鎖に追い込まれた海水浴場も多い。工業化の進展にともない、海水浴場のあった美しい海岸が埋め立てられてかつての面影を失ったところも少なくない。

交通機関の発達によって遠くの海辺に簡単に行けるようになったことや、レジャーの多様化、海洋の汚染などの要因もあって、現在県内の海水浴場には、かつてのような賑わいが見られなくなったところが多い。それでも、今年も多数の海水浴場が開設されている。夏と言えば、海水浴を思い浮かべる方も多いはず。この夏、あらためて身近なあいちの海へ出かけてみてはいかがでしょうか。

(主な参考文献)

- ・小口千明「日本における海水浴の受容と明治期の海水浴」
『人文地理』第 37 巻 3 号 (1985 年) 所収。
小口『日本人の相対的環境観』(古今書院 2002 年)に加筆改題して収録。
- ・『名古屋鉄道社史』 (名古屋鉄道 1961 年)
- ・『知多半島の名鉄 90 年』 (郷土出版社 1999 年)
- ・『南知多町誌 本文編』 (南知多町 1991 年) その他各市町村史